

承空本（西山本）『小野篁集』紙背文書に関する覚書

－鎌倉末期における西山往生院と室町「周辺」－

仁 藤 智 子

【キーワード】 篁物語 小野篁集 西山本（承空本） 紙背文書
承空 栖空 西山往生院 室町院

はじめに

『篁物語』の現在確認されている最も古い写本の一つに、承空本『小野篁集』がある。この写本は、承空本特有の表紙の花押もなければ、奥書もない。ただ、筆写された片仮名を主とする本文は、他の承空本と同筆であることが確かめられ、それゆえに承空本の一つとされてきた。

そもそも、承空とはいかなる人物であるのか、なぜこのような歌書の筆写活動を行わなければならなかったのか、承空本（広義には西山本に内包される）がどのような経緯をもって冷泉家時雨亭文庫に収蔵されるようになったのか。

本研究の一つの課題として、承空本が成立した歴史的な背景を、鎌倉末期の、文化を介在とした人的ネットワークの発露として捉えていくことがあげられる。以上の問題意識から、今までに明らかになったことを確認しておきたい。

(1) 「歌僧・承空の基礎的考察」(『篁物語』の総合的研究 3・『国士館人文学』9号、2019年)

鎌倉末に、京都の西山往生院で行われた、承空を中心とする歌書筆写活動を整理し、歌書群（承空本を含む西山本）の全貌を提示した。承空は、有力御家人宇都宮頼綱の孫で、藤原（二条）為氏とは従兄弟にあたり、その文学的素地は宇都宮歌壇と鎌倉歌壇・京都歌壇との交流が背景となる。承空本を含む西山本とは、鎌倉後期に、浄土宗の西山往生院において、藤原資経（甘露寺資経とは別人）等から借用して筆写した歌書群である。これら西山本は、承空の死を契機に二条家へ寄進され、その後に冷泉家に移管されたと想定される。

(2)「西山本（承空本を含む）の基礎的考察」（同5・『同』11号、2021年）

西山本の表紙に記された花押と奥書を手掛かりに、西山本の整理を進めた。表紙にある（あった）花押によって、承空が直接筆写に関わった本を西山本の中から承空本として切り分けることができる。また奥書から、その筆写活動がなされた場として西山・往生院と京中の「室町宿所」があり、承空の筆写活動は永仁四（1296）年夏～正安元（1299）年冬頃が中心で、歌書の筆写順が判明した。今後、「室町宿所」がどのような場所であるのか、さらに同時代の藤原資経本との関連について調査を進める必要がある。

以上の問題を解明するためには、西山本（承空本）の紙背文書の検討が必須となる。紙背文書は、狭い意味での承空本では二五四通、西山本全体では四二六通に及ぶ。西山本にも承空の勘返状などあり、四二六通を総体として検討しなければ、意味をなさない。そこで、小稿では、その第一歩として承空本『小野篁集』（『篁物語』）の紙背について取り上げてみたい。

『冷泉家時雨亭叢書』に収載された承空本の紙背文書は、以下三つに分類できるとする¹。

- ①歌書や聖教の貸し借りや書写に関する文学・仏教関係
- ②承空の師である栖空の追善など仏事関係
- ③往生院の生活基盤である所領や生活関係

承空本の紙背文書に見える三分類の内容は、ほかの素寂本、清誉本、義空本の紙背文書にも共通している。その点からも、前稿（1）・（2）で指摘したようにこれらは西山本の範疇であると捉えて、分析が求められることになる。さらに、

- ④連歌関係

が西山本の分類として加えられる。

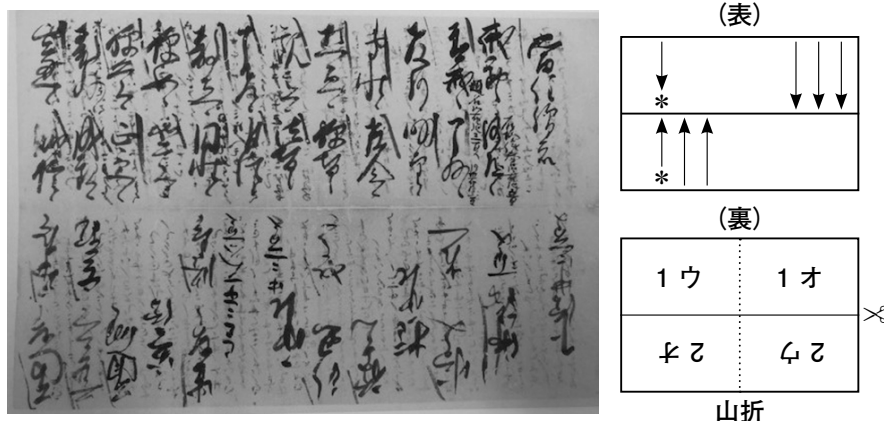
以上から、栖空の仏事関係文書（②）からみえる鎌倉末期にあたる永仁年間の西山往生院の様相と、『小野篁集』の紙背文書から判明する承空を取り巻く人的ネットワークの一端を披露することを小稿の課題とする。

一 西山往生院の僧侶たち

紙背文書からは、西山往生院を継承した栖空²の門弟が居住していた様子がわかる。栖空については前稿（1）でも触れているが、簡潔にまとめておきたい。法然・房源空が没すると、鎮西派・西山派と親鸞が興した浄土真宗に分かれた。さらに西山派を率いた証空のあと、西谷派・深草派・東山派・嵯峨派とこれらに属しない栖空に分かれた。遊観房栖空は、天台宗観性ゆかりの地を、慈円を経て得た西山往生院に住持し、弟子たちを指導した。玄観房承空はその高弟で、栖空の没後「西山往生院五代長老」となっている。

西山（承空）本『家持卿集』第4紙と第5紙の紙背文書になる「五七日仏事布施注文」(6)、同第6紙と第7紙紙背文書の「五七日仏事記」(7)には、永仁六(1298)年四月に没した栖空の五七日法要に従事した僧侶が見える。

「五七日仏事布施注文」(6)の形状は折り紙である。使用後、折り紙をそのまま折半し、裏返して半紙の真ん中で山折りとし、袋綴じの冊子本としている。そこに歌書『家持卿集』が筆写されている。(【図1】)。



【図1】五七日仏事布施注文

一次文書となる布施注文は以下の通りである。

■「五七日仏事布施注文」(6)

(折り紙・表)

当住僧衆

石塔供養師布施五百文

戒勤、(注：ゝは房の略)

証道、

題名御布施三百文

同御布施三文

善戒、

了縁、

教証、

明聖、

専性、

教念、

想恵、

禪智、

観意、

法智、

了教、

唯信、

静恵、

円性、

禪如、

如覚、

禪覚、

正受、

静縁、

成観、

玄忍、	誠信、
(折り紙・裏)	
道智、	本道、
蓮恵、	玄觀、(注：玄觀房とは承空のこと)
<u>道明、</u>	
客僧	
生智、	修善、
	已上三十一人各百文
承仕 中三百文	
行忍	如意
禪光	
權承仕	
□文	彦一
佛錢百文	
下僧中三百文	

(注：太字は「五七日仏事記」(7)に見える僧名。下線は「閏月月行事次第」(56)に見える僧名。)

注文の筆者は玄觀房承空と考えられるので、栖空の名跡である西山往生院を継いだ彼のもとには、「客僧」である生智房と修善房を除く二十八名の僧侶と、承仕(ジョウジ)、權承仕(ゴンゾウジ)といわれる仏事などの雑事を務めた下級の僧が数名住持していたが知られる。

「五七日仏事記」(7)によれば、栖空の五七日法要では、越前律師が仏經供養導師を務め、石塔供養導師は証道房、阿弥陀仏三尊供養導師は善戒房、墓所読經導師は了縁房が務めて執り行われた。越前律師と客僧である生智房・修善房の二名は、往生院外の僧侶であつたと考えられる。それ以外の承空含めた二十九名の僧侶、承仕ら五名らは往生院に共住していたと考えて差し支えない。

上述の栖空の五七日法要が行われた日は、永仁六年五月二十二日と考えられるが、この仏事の一環として、上記にも名に見える如覚(「如覚諷誦文」(90))と名不詳2名(「某諷誦文」(202)・「同」(203))が諷誦文を捧げている。また、六七日にあたる六月六日の日付を持つ諷誦文もある(91)・(200)・(201)。一連の諷誦文を【表1】に整理した。

これによると、諷誦文を納めた僧名で判明するのは、如覚・蓮慧・定昭・専性であるが、如覚・蓮慧(恵)・専性は、先の文書(6)・(7)にも見えており、往生院在住僧であることが確かめられる。定昭は、栖空の弟子で五七日の導師を務

【表 1】永仁六年栖空の仏事にかかわる諷誦文

文書番号	僧名	布施	年月日	紙背の歌書	歌書の筆写年月日	書写年代
90	如覚	(中欠)	永仁六年五月廿二日	『大中臣頼基集』	不明 □月十六日の信 季書状含む	永仁六 (1298) 年六月 以降
91	定昭	御布施一裏	永仁六年六月六日			
92	蓮慧	御布施一裏	永仁六年六月六日			
175	比丘尼念阿	御布施一裏	正安元年七月九日	『家経朝臣集』	正安元(1299)年 十一月十二日	奥書の通り
176	比丘尼経阿	御布施一裏	正安元年七月九日			
199	(後欠)	厚紙十帖	(欠)	『基俊朝臣集』	不明	永仁六 (1298) 年六月 以降
200	(後欠)	御布施一裏	永仁□年六月六日			
201	専性	御布施一裏	永仁六年六月六日			
202	(後欠)	御布施一裏	永仁六年五月廿二日			
203	(後欠)	御布施一裏	永仁六年五月廿二日			

めたことが書状(112)・(113)から判明する。その際に、「当院宿老などに可被仰候歟」と、五七日の導師は、往生院在住僧から出すべきではないかと承空に進言し(113)、辞退を申し出ていた(11)ことから、往生院に住んでいなかったことがわかる。定昭については、宗教活動だけでなく、経済活動などにも興味深い点がある。ので後日に期したい。

さて、ここで留意したいのは、栖空の仏事とはかかわりが不明の2通の諷誦文である。いずれも、「比丘尼念阿」(175)・「比丘尼経阿」(176)と、女性出家者による諷誦文である。これら二通の諷誦文は、正安元(1299)年七月九日の日付を持つが、これの紙背を利用して筆写されたのが『家経朝臣集』である。この家集については、前稿(2)で触れたが、表紙に承空の花押が入っており、「正安元年十一月十二日／於西山往生院書了／承空」という奥書・署名がある。正安元年七月の日付を持つ諷誦文が、四ヶ月足らずの同年十一月には反故となり、歌書が筆写されている。このことから、【表1】の諷誦文も同様の扱い—使用されてから反故として二次利用されるまでの日が浅い—を受けたことが想定できる。諷誦文が他所に出ることは少ないとすると、歌書筆写の年月日が判明しない『大中臣頼基集』(90)・(91)・(92)と『基俊朝臣集』(199～203)も、諷誦文が奉納された永仁六年六月以降、そう遠くない時期に西山にて筆写されたことになろう(【表1】参照)。永仁六年六月は、承空は後述するように洛中・室町に滞在していることが確認されるので、西山に帰山後に筆写されたと考えられる。

歌書の筆写された年月日が奥書などからわからない例は、西山本(小空本を含む)には少なからず存在するが、このような紙背文書の読解が進めば、歌書の筆写活動の時期や実態により迫っていけるはずである。

また、『貫之集・上』の第12紙・第13紙の紙背文書である「閏月月行事次第」(56)からは当時の往生時の僧房生活の一端が伺える。

■「閏月月行事次第」(56)

閏月月行事次第

教念房 一日 二日 三日

禪智房 四日 五日 六日

法智房 七日 八日 九日

了教房 十日 十一日 十二日

唯信房 十三日 十四日 十五日

円性房 十六日 十七日 十八日

道明房 十九日 廿日 廿一日

禪如房 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日

如覚房 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日

(注：下線は「五七日仏事布施注文」(6)にみえる僧名。)

この「月行事次第」にみえる九名の僧侶は、すべて先述した「五七日仏事布施注文」(6)にみえる。西山往生院では三十名前後の僧が居住していたので、三つぐらいのグループで番を組んで、月行事を担当していたものと考えられる。

ここにみえる「閏月」を特定するために、永仁六年前後の閏月を調べてみると、

永仁三(1295)年 二月

永仁五(1297)年 十月

正安二(1300)年 七月

嘉元元(1303)年 四月

が該当する。この文書は『貫之集・上』の紙背として伝わるが、同じ『貫之集・上』の紙背として伝わる照空の書状(57)には「後十月廿九日」、さらに、良証の書状(53)にも「後十月廿二日」とみえる。このほか承空本の紙背文書群には、「閏十月」「後十月」という記載の文書が複数ある。永仁五年三月に発令された徳政令に関する文書が、この一群に含まれていることと、この周辺で十月に閏月があるのは、永仁五年だけであることを加味すれば、「閏十月」と上記文書の「閏月」(56)と「後十月」(53)・(57)は、永仁五年閏十月のことと考えざるを得ない。

また、この文書は『貫之集・上』の紙背として伝わるが、『貫之集・上』自体は筆写年月日が不明である。この結果を踏まえると、『貫之集・上』が筆写されたのは、永仁五年以降になる。『貫之集』は、上・中・下の三分冊となっているが、これらの紙背文書は様々な種類の文書から構成されており、興味深い内容を有するが後日に期したい。

話が散漫になってしまったので、本筋に戻そう。紙背文書として伝わる「五七

日仏事布施注文」(6)、「五七日仏事記」(7)、「閏月月行事次第」(56)からは、栖空最晩年の永仁五年から、栖空亡き後、承空へ長老座が移行した永仁六年の、三十人前後の僧侶が住持していた西山・往生院の様子を垣間見ることができるのである。

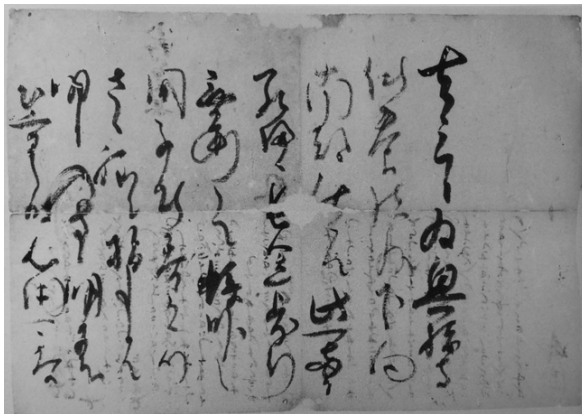
二 『小野篁集』の紙背文書

『小野篁集』は、もともと書状を反故にしたものを、折紙のまま半切して筆写し、袋綴じし冊子本にしたものである。繰り返しになるが、紙背文書といわれる文書が、本来一次文書であり、『小野篁集』は二次利用ということになる。その対応については【表2】を見ていただきたい。

『小野篁集』は、【表2】にみえる盛徳書状(14)以下、承空書状并照空勘返状(20)に至る七紙六通の書状₄を再利用したものである。表紙になっている盛徳書状は

【表2】『小野篁集』と紙背文書

小野篁集		紙背文書		関連する僧侶
表紙	オ ウ	14	盛徳書状	盛徳
1	オ ウ			
2	オ ウ	15	承空書状并蓮恵勘返状	蓮恵
3	オ ウ			
4	オ ウ	16	忠円書状	忠円
5	オ ウ			
6	オ ウ	17	某書状	(同一書状)
7	オ ウ			
8	オ ウ	18	某書状	
9	オ ウ			
10	オ ウ	19	某書状	
11	オ ウ			
12	オ ウ	20	承空書状并照空勘返状	照空
裏表紙	ウ オ			



【図2】盛徳書状

(裏)		
1 ウ	1 オ	✂
ㄱ ㄷ	ㄱ ㄷ	

【図2】のようになっている。

盛徳の書状によれば、盛徳は興福寺供養の結解のために南都（奈良）に下向し、一兩日中に帰京したが、徒歩で往復したため疲労困憊した様相が語られる。盛徳と承空は『文治二年歌合』（西山本No.43）など歌書を貸借している様子が、二人の勘返状（282）からわかる。このほか藤原資経などとも歌書の貸借を行っている（(48)・(154)ほか）が、詳細の検討は今後の課題としたい。ここでは、盛徳が承空と歌書の貸借を行う関係で、承空による歌書の筆写活動の重要な部分を担う存在であったことを確認するにとどめておく。

『小野篁集』紙背文書のうち、二通は承空と他の僧侶との間を往復した往復書簡ともいべき勘返状である。承空が相手に出した書状に、相手方が返信を加筆してきたもので、そのため承空の手元に往復書簡が残ったことになる。

まず、「承空書状并蓮恵勘返状」（15）を見てみよう。

■「承空書状并蓮恵勘返状」（15）

（端裏切封上書）

「『（墨引）』

『蓮恵状』

（墨引）

蓮恵御房

承空₅」

（異筆、以下同じ）

「御志とハ見え候ぬ、あはれ候へかしと存候へとも、
候ハさらんもちからなく候へ、不取敢勘申入候、
恐懼候、」

「一畏承候了、」

用途事委細に非を書候て、西七条へ申遣て候

「一加一見了、やかて返進之候」「一無力候、」

へハ、返事如此候、とをとをと申て候かゐな

く候へハ、遺恨候へ、此上ハいかゝし候へ

「一例時以後必可参候、」

き、いかさまにも今夜是へ御渡候へ、申談候

「一先ともかくも御はからひ候へく候、今

はん、今朝の用途も渡御之時可有御沙汰候也、

一連相構可有御秘計候、」

恐懼謹言、

「蓮恵状」

十二月十一日 承空

以上をわかりやすいように、承空からの書状と蓮恵からの返信に分けてみよう。

1) 承空から蓮恵への書状

『蓮恵御房 承空』（端裏）

用途事委細に非を書候て、西七条へ申遣て候

へハ、返事如此候、とをとをと申て候かゐな

く候へハ、遺恨候候、此上ハいかゝし候へ

き、いかさまにも今夜是へ御渡候へ、申談候

恐懼謹言、

十二月十一日 承空

2) 蓮恵から承空への返信

『（墨引）』『蓮恵状』（端裏）

「御志とハ見え候ぬ、あはれ候へかしと存候へとも、

候ハさらんもちからなく候候、不取敢勘申入候、

恐懼候、」

「一畏承候了、」

「一加一見了、やかて返進之候」「一無力候、」

「一例時以後必可参候、」

「一先ともかくも御はからひ候へく候、今

はん、今朝の用途も渡御之時可有御沙汰候也、

一連相構可有御秘計候、」

「蓮恵状」

蓮恵は、先の諷誦文に見たように蓮慧（92）とも記される往生院在住の僧侶の一人である。承空が、「(何かしらの)用途のことを詳細にしたためて西七條に送ったところ、その返事は芳しくなく、遺恨である。こうなっては今夜次善策を相談したく、私のもとに渡御してくださらないか」と蓮恵に書き送った。それに対して、蓮恵からは、「例時以後必可参候」と了解した旨が返信されている。西七条での用事が予想外の展開をしたことに対して、承空が蓮恵に相談を持ち掛けている様子がわかる。蓮恵については精査しなければならないが、その僧名が宇都宮氏の出家者が用いる「蓮」という用字であること⁶を思い浮かべると、一族出身の僧侶であった可能性もある。

次に「承空書状并照空勘返状」（20）を見てみたい。

■「承空書状并照空勘返状」（20）

（前欠）

（異筆、以下同じ）

「一生存仕候、」

今月下旬二も当寺別時に候へハ難治候、今月

「一」

許暇申たく候、さのミ書絶不参、其恐不少之

「一」

由令申候、御許候ハ、畏存候、又愚身も御忌

「一事々期御出京之次候、」

日以後随躰可令参入言上候、毎事期其時候、

「一」

恐懼謹言、

「一」

「照空上」

十一月十五日

承空状

（切封上書）⁷

（墨引）

『（墨引）』『照空』

清和院殿 承空状」

（＊太字は承空から照空への書状。細字はそれに対する照空の返信。）

この文書は、十一月十五日に承空から清和院照空に出された書状に、照空が返信を加筆したものである。清和院照空は深草派の僧侶で、聖教などの貸借などを

通じて承空と親交があったことが知られる（一例として、(75)・(79)・(140)・(157)・(57)・(101)・(147)・(159) など）。聖教の筆写は、歌書と並んで承空らの主たる活動となったわけであるが、他派である深草派から借り受けるなど宗教活動としても興味深い。

最後には「承空」の自署がある。これは前稿（2）で確認した同筆である。



【図3】「承空書状井照空勘返状」(20)「承空書状井蓮恵勘返状」(15)の自署

【図3】にみえる承空の自署文書を紙背に使っていることから、『小野篁集』は紛れもなく承空本の一つであることが確かめられる。

さて、『小野篁集』の紙背文書の中には、注目すべき文書がもう一つある。「忠円書状」(16)である。この忠円が、元弘元(1331)年の元弘の変に関与した浄土宗僧侶忠円と同一人物であるかは検証を待ちたいが、忠円がこの書状を承空に送ったと思われる十月十九日に、承空が宛先の「室町殿御宿所」に滞在していたということに注目したい。承空が西山を降りて、「室町宿所」にとどまり、歌書の筆写を行ったことは、前稿（2）でも触れた15『清正集』・19『藤原元真集』・2『家持卿集』の奥書から明らかである。

- 15 清正集 永仁六年六月八日於 / 室町宿所書写了 / 承空
(別筆) 承空上人 / 寄進之
- 19 藤原元真集 永仁六年六月廿四日於 / 室町宿所書写了 / 承空
(別筆) 承空上人 / 寄進之
- 2 家持卿集 永仁六年六月廿五日 / 於室町宿所書写了 / 承空
(別筆) 承空上人 / 寄進之

承空の洛中での活動拠点の一つとして「室町」があったことになる。

では、この「室町宿所」とはどのような場所かが問題となるが、以下の想定が許されよう。

- 1) 西山往生院の関連施設
- 2) 宇都宮氏ゆかりの洛中室町にある拠点
- 3) 女院・室町院の周辺

この時期、「室町」といえばある人物が思い起こされる。室町院と称された後堀河皇女暉子内親王の存在である。彼女は膨大な荘園群である「室町院領」を継承し、彼女の死後、持明院統と大覚寺統の皇統争いのなかで争点の一つとなったことは周知である⁸⁰。承空の「室町宿所」での度重なる滞在が、室町院やその周辺の経済あるいは文化交流と関連するの否か、今後、四二六通を数える西山本（承空本を含む）の紙背文書の整理を通して、明らかにしていきたい。

おわりに

本稿は、西山本（承空本も含む）の紙背文書に注目して、鎌倉末期の西山・往生院をめぐる状況と『小野篁集』の紙背文書を検討した。明らかにしたことをまとめておきたい。

(1) 永仁五（1297）年から同六年における西山・往生院では、証空亡きあと、門徒を指導してきた栖空が示寂すると、跡を継いだ承空のもとで三十名前後の僧侶が居を共にしていた。栖空の仏事関係文書から、その様相を垣間見ることができる。

(2) 仏事関係史料を解読することによって、筆写された年紀のわからなかった『大中臣頼基集』と『基俊朝臣集』は、永仁六（1298）年六月以降、それほど遠からずに筆写されたことが判明した。併せて、『貫之集・上』が筆写されたのは、永仁五年以降になり、『貫之集・中』『貫之集・下』の紙背文書の検討が求められる。

(3) 『小野篁集』は七紙六通の書状の紙背を利用して筆写されている。そこから承空の周辺にいた僧侶—盛徳・蓮恵（慧）・忠円・清和院照空—との関係が浮かび上がってくる。承空の周辺では歌書だけではなく、聖教も筆写されているが、その貸借関係も今後の紙背文書の整理・分析によってより明らかになる。

(4) 歌書の奥書に記されていた「室町宿所」が、紙背文書の忠円書状に「室町殿御宿所」とみえ、ここが洛中における承空の活動の一拠点となっていたことが明らかである。当時、室町といえば、膨大な荘園領主である女院・室町院がおり、今後の慎重な検証が必要ではあるが、承空の経済活動及び文化活動の接点として想定しえる。

紙背文書として伝来した承空を取り巻く様々な書状や覚書によって、歴史の表

舞台には残らなかった西山往生院の息遣い、承空を中心とした重層的な人的ネットワークの抽出が可能になるものと思われる。多くは今後の検討に期さなければならないが、拙い覚書として筆を擱きたい。

〈註〉

- 1 田中倫子「各本紙背文書解題」(『冷泉家時雨亭叢書第82巻 冷泉家歌書紙背文書 下』所収、朝日新聞社出版局、二〇〇七年)。
- 2 前稿(1) 所載の【図2】(152頁)を参照。
- 3 前掲注(1) 参照。小稿において、藤本孝一氏「本巻所蔵紙背文書の書誌」(『冷泉家時雨亭叢書第82巻 冷泉家歌書紙背文書 下』所収、朝日新聞社出版局、二〇〇七年)および田中倫子「各本紙背文書解題」(『同』)には多大な教示を得た。紙背文書の番号は、すべてこれによる。また、文書の解説については、写真本には収められていない情報があったため、随時田中倫子「釈文」(『同』)を参照した。小稿における釈文の文責は筆者が負うところである。
- 4 文書(17)と(18)は同筆であるが、内容的にもつなげて考えることができ、一通とみなしておきたい。
- 5 前掲注(2)の田中倫子の釈文による。この箇所は、写真本には掲載されていないため、確認することはできなかった。
- 6 承空は下野国御家人宇都宮氏の出自である。祖父の宇都宮頼綱は出家名を蓮生と称した。詳細は前稿(1)に譲るが、宇都宮家の僧名は以下の通り。
 頼綱(蓮生)―泰綱(順蓮)―景綱(蓮喩)―貞綱(蓮昇)
 実兄の景綱は永仁六年に没している。
- 7 前掲注(3)の田中倫子の釈文による。この箇所は、写真本には掲載されていないため、確認することはできなかった。
- 8 鎌倉後期における天皇家の所領の相続に関する相論については、八代国治「長講堂領の研究」(『国史叢説』所収、吉川弘文館、1925年)、中村直勝「室町院領」(『中村直勝著作集』第4巻、淡交社、1978年、初出は1934年)以来、古くから議論があり、伴瀬明美「東寺に伝来した室町院遺領相論関連文書について」(『史学雑誌』108篇3号、1999年)などの蓄積がある。天皇家の動向としては、近藤成一「鎌倉幕府の成立と天皇」(『講座・前近代の天皇1』所収、青木書店、1992年)、女院領の伝領と追善供養の関係については白根陽子『女院領の中世の展開』(同成社、2018年)がある。多くは、荘園の伝領に注目しているが、この時期における室町院という人物、またその周辺に形成された人的ネットワークについては触れられていない。叔母である式乾門院利子(伊勢斎宮・四条天皇准母)から、一期分として所領を相続し、利子が猶子とした後嵯峨皇子・宗尊親王(鎌倉將軍)に渡すことを期されていた。宗尊親王は中書王とも称さ

れて、在鎌倉時代にも、歌人ら文化サロンの中心となっていた。鎌倉歌壇・宇都宮歌壇・京都歌壇の担い手の一つが宇都宮氏であったことは前稿（1）でも触れている。

（付記）本文に引用した写真はすべて、『冷泉家時雨亭叢書 82 巻 冷泉家歌書紙背文書・下』（朝日新聞社、2007 年）によるものである。

（付記 2）冷泉家時雨亭文庫の調査に深く携われ、その知見をまとめた藤本孝一『本を千年伝える―冷泉家蔵書の文化史』（朝日新聞出版、2010 年）には多くの教示を得た。また、前稿公表後に、氏より懇切なご指導を得たことに謝意を表したい。

藤本氏の前掲書による、歌書を集積・研究することで他家との差別化を図ることは、歌学の権威・家柄を守り伝えていくことであるという指摘（vi ページ）、さらに冷泉家とは対立していた家から、冷泉家に収蔵されるに至った本のグループが複数存在すること（91 頁～162 頁）を明らかにされたことは、貴重な成果である。私たちが扱っている西山本が、鎌倉時代に冷泉家と敵対する二条家の蔵書に伝来するものであることを意識しつつ、なぜ僧侶である承空がこれほどまでに歌書の筆者活動に情熱を傾けたのか、資経本の制作者藤原資経との関係はどのようなものであったのか、承空を取り巻く「人的ネットワーク」を究明していかなければならない。